Last Word

葉月　晴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｌａｓｔ　Ｗｏｒｄ

【Ｎコード】
Ｎ４６１０Ｕ

【作者名】
葉月　晴

【あらすじ】
古文書「フォーマリー」の目覚めによって、すべての針が動き出した。
偽りと真実の狭間に存在する世界、オレシアで主人公バレクは己の意志を貫きとうそうとする。
こちらの世界では天才少年、あちらの世界ではフェアリーキングとして、２つの種族の争いを止めようとするバレクだが、その影で糸をひく者が予想以上にいて……。

全ての世界を舞台に繰り広げられる、壮大なファンタジー

――君はこの世界の幻想から何を見いだせるのか――

（※この小説は霜月雪の友人のかいた小説です）

プロローグ（前書き）

※この小説は霜月雪の友人のかいた小説を連載しています。

プロローグ

何かが羽ばたく音とともに、黄色い一本の線が空に描かれた。
炎龍(えんりゅう)はゆっくりと片目を開けた。そこには鱗(うろこ)の色とはまったく違う、それでいて燃えるような紅い瞳があった。
「のう、友よ。奴はまたどこかへ行きおった」
暗闇の中、その低くどこか聞き覚えのある声は、どこまでも響きわたった。
まるで、頭の中に直接話しかけてきているかのようだった。
しばらくたってから、前方に青色の光が見えた。その光は、炎龍の燃えるような紅い瞳とは相対するものだった。
寒々としていて、それでいて吸い込まれそうな蒼い瞳だったのだ。
炎龍はその視線を紅い瞳でしっかりと受け止めた。光沢のあるその瞳には蒼い龍――――冷龍(れいりゅう)がしっかりと映し出されていた。
ようやく冷龍が口を開いた。
「……奴は気まぐれじゃ。ほうっておけ」
鈴のようなりんとした声だったが、どこか呆れたような言い方だった。
「そういうわけにはいかん。わしらも、もう歳じゃ」
すると、半分怒りの混じった声が返ってきた。
「お前さんみたいなよぼよぼと一緒にされるとはな。わしはまだ元気じゃぞ、ほれっ！」
そういって鼻から冷気を勢いよくだし、魔力で固めてしまった。
暗闇の中に、龍からすれば小さな蒼いクリスタルが浮かび上がった。
「はっはっは！綺麗じゃ、綺麗じゃ！怒らせたかいがあったわい」
そういうと炎龍は真剣な顔に戻ってしまった。冷龍は少し不安を覚えた。いつも陽気な炎龍だが、勘が鋭く、重大なことになると決まった真剣そのものとなる。

炎龍がいつまでたっても口を開こうとせずにいるので、冷龍は決まりが悪くなった。
というより、苛立ち始めていた。たった5分しかたっていないというのに。

そして、我慢の限界が来た。

「何か言いたいのなら、すぐに言えっ！」
その声、というより雄叫びは、炎龍の頭の中でハエのように幾度も鳴り響いた。
炎龍はか細い声でやっと言った。
「こやつめ……、ついに、動きよった…ぞ」
そういって苦々しげに笑った。その顔には明らかに絶望がにじみ出ていた。
冷龍も今まであった怒りがどこかに行ってしまった。その代わりに、絶望と疲労感が身体を駆けめぐった。あまりに突然のことで、言葉が出てこなかった。
そして、なるほどな。と納得した。光龍(こうりゅう)が先ほど光の速さで飛んでいったのは、こういうことだったのか。だから『こいつ』に気づかれる前に行動に移した。

わしら――――いや、友を信じてこの場を託したわけだ

「たいした奴じゃな。わしらに世界の均衡を全て預けてしまうとは」
ふいにぽつりと出た。言葉に出してみると、いくらか希望が出てきた。
「まったくだ。あきれてものもいえん」
その声はさっきのか細い声とは違い、感心の色が浮かんでいた。
どうやら、炎龍も光龍の行動に気づいたようだ。
厭、もしかしたら飛び去ったあの時にもう気づいていたのかもしれ

ない。
冷龍は笑った。
「どうする？わしらも奴を脅かしてみないか？」
炎龍は訳がわからないという目で冷龍を見た。
「今から何を始めようというのじゃ」
「偽りと真の儀式さ」
冷龍は他になにがある、と言わんばかりの顔をした。だが、内心では不安だった。
神の使いと恐れられるに値する魔力はある。それは確かだ。
無限とも思われるこの魔力はたとえ地獄に行こうと身体を護ってくれるだろう。
冷龍の場合、地獄ではなく天界になるが。
そんな神の使いが不安を抱くほどのものが、この儀式なのだ。
「前にやったのは、何年前じゃ？」
「あれは……、確か神の死ぬ前じゃったな……。5千年前じゃ」
「あの頃は若かった……」
「やらぬというのか？ならわしは一人でやるぞ？」
炎龍は皮肉っぽい笑みを浮かべた。
「馬鹿をいうな。『こやつ』が動き出したんじゃ。わしらもスリルを満喫せねば」
この時、冷龍は本気でこう思った。
身体ばかり歳をとりおって――――と。なんとか顔に出さずに済んだのが唯一の慰めだ。
「始めるのなら、すぐにやろう」
冷龍は一呼吸おいてから言った。炎龍は頷く代わりに、長い首を少し持ち上げる。本当に少しだけだが。
冷龍も同じように首をあげ、二匹同時に炎を放った。
放たれた2つの炎は混ざり合うことなく、主人の前で魔法円を描き始めた。
直径二メートルの円が出来たかと思うと、外側に飾りをつけるかの

ように、何億もの文字が重なり合った。人間が見たら―――あくまで見られたらの話だ。失敗かと思うだろう。
なぜなら人間は一種類の言葉で作り上げなければ魔法円が完成しない、と思っているからである。実際は決められた場所、重なり方さえ守れば誰でも二種類の言葉を使った魔法円が完成するのだ。
もし人間がこのことを知っても、技術が足りなければ知識も足りないだろう。
ましてや、億単位など神技にも等しい。まあ、龍とは神の使いだから、出来て当然かもしれないが。

１０分後、ようやく億単位の文字が収まりきった。完成した魔法円は光り輝くと同時に、ものすごい量の魔力を蓄えていた。
二匹の龍は自分たちの作りあげた物を、しげしげと眺めた。
不安もあるが、久しぶりに大量の魔力を使ったせいで、感心している暇などない。今の世界で人間が生存しているかは知らないが、一刻も早く儀式を終わらせ、完成品を地上に送りたかった。
もうそのことしか頭になかった。
冷龍が突然口を開いた。
「この者になにを授けるのじゃ？」
炎龍は少し考え込むような顔をしてから、無理に笑った。
「この翼と、鱗じゃ」
それを言うと同時に、炎龍は翼の一部と紅い鱗を一枚抜き取る。抜き取った後から血は流れなかった。
「お前はどうするのじゃ？」
そういって得意げに翼の一部と鱗を魔法円に投げ入れた。
すると、魔法円が待ってましたと言わんばかりに輝き、一本の紅い光となって上へと伸びていく。投げ入れられた物は光の内側にふわふわと浮いているだろう。
冷龍はその蒼い瞳を上へ向けた。

どこまでの続く暗闇の中に、どこまでも続く紅い光が矢のように伸びていた。
その「どこまでも」の終わりを見つけたくて、ずっと上を向いていたが、炎龍が話しかけてきたのでその謎を解明するのは先延ばしになってしまった。
「さあ。どうするのじゃ？」
半分急かしているが、もう半分は焦りだろうか。炎龍の勘は少なくとも冷龍より鋭いから、何かに気づいたのかもしれなかった。
ならば、ぐずぐずしているわけにはいかない。
冷龍は意を決して翼の一部と爪を抜き取った。炎龍と同じで、血は一滴も出ていない。
冷龍は自分が選択した物に満足していた。
これなら完成品はどちらも飛び、能力の違いもできる。そのうえ、魔力は互角のはずだ。
冷龍は炎龍と同じように、翼と爪を魔法円に投げ入れた。予想した通り、魔法円から蒼い光が迸(ほとばし)り、物を包んでしまった。
「さあ、後は決まり文句じゃな」
「決まり文句だと？」
炎龍はびっくりしたように言った。冷龍は顔を顰めた。
「呪文じゃよ。呪文」
ああ、そうか。まったく、変な言い回しをしおって
炎龍はため息をついた。さあ、これで終わりだ。
冷龍も炎龍と同じように、達成感が身体を包む。今思えば、久しぶりの仕事がこんな大きなことだとは。
冷龍は鈴のような声で、炎龍は竪琴のような声で唱え始めた。
その呪文は、唱えると言うよりは、語るといったほうがあっていたかもしれない。
「我が魔力をもって、虚空(こくう)の空間を生みださん。狭間の世界として、数多くの世界の中心とせん。名はオレシア。虚ろな時の流れを主として、その存在を認めよう」

二匹の龍は、そこで一度区切った。そして、また呪文を語り出す。
「世界の均衡は偽りによって護られ、真の姿によって維持される。神の手のひらですくすくうと育ち、その花を咲かせよ。偽りは真の影あり。真も偽りの影である。双方は我らの意志を継ぎ、数多ある幻想の中の唯一形ある者として存在するであろう。大いなる役目を背負い、己の力を全うせよ。その瞳が意味するものを知り、自らの針路を辿れ。我らの子たち」
そこで炎龍は口をつぐんだ。そして、冷龍が先を続けた。
「風をもって、精を守り、天界への扉として、そなたの力をふるえ」
次は炎龍の番だ。
「風に乗り、人を守り、地獄への扉として、そなたの力をふるえ」
二匹は声を合わせて言った。
「汝に時を与えよう！」
呪文の完成と同時に、２つの魔法円の光が増し、地震と共に凄まじい音が全身を支配した。
この時ばかりは二匹の龍も目を開けていられなかった。
すべては一瞬にして終わった。魔法円は跡形もなく消えていた。もちろん、どこまでも続く光もなかった。
やっと終わった、と安堵の息もつかぬ間。大変なことに気づいた。
『こいつ』が目覚めたことよりも、もっと重大なこと。
世界の均衡が、中心を軸にして天界と地獄までぐらついてしまったのだ！
ほんの一瞬だったが、調べることにしたことはない。
光龍のように光の速さで移動できないので、自分の意志を世界中に飛ばす。実際には、水が流れるように段々と広がっていった。水などと比べもにならないくらい速かったが。

１分後、ゆっくりと瞼を開けた。
今のところ、どこには問題はなかった。ひとまずは安心だ。
「冷や冷やするの」

冷龍は笑ったが、その顔は不安で引きつっていた。
「まったくだ。老いぼれのわしにとってはスリルがありすぎじゃ」
そう言って、炎龍も笑ってみせた。

偽りと真の儀式は終わったのだ。

第一章　（1）

バレクほど性格の良い人間はいないだろう。

この日もベットの上に座り、無駄に分厚い本を広げて窓を見ていた。窓からは、これでもかと言わんばかりの日の光が入ってきている。バレクは、はあ…とため息をついた。母さんは、なぜカーテンを取ってしまったんだろう。

確かに部屋に閉じこもってばかりだけれど、不健康なわけではない。それに運動に関しての自信はないが、勉強にはとてつもない自信がある。

バレクは7歳の時に、全課程を終えていた。小、中の9年間はもちろん、高校での6年間学習期間を首席で卒業した。やり方は至って簡単。教科書を丸暗記したのだ。

小、中、高の国語・数学・理科・社会・英語は5歳の時に。6、7歳の時はこの世界の科学について興味を示し、先生を質問攻めにした。それでも納得のいく答えが返ってこなかったので、父さんにパソコンを買ってもらい、一日中キーボードを叩き続けていた。

これでバレクが部屋にこもるようになった理由は分かっただろう。

結局科学の分野は、先生の称号と博士の称号を取得(しゅとく)した。どちらも史上最年少だ。

バレクは膝の上に置いてある本に目を移した。この本はパソコンを買うかわりに、すべて覚えろと父さんに言われた物だ。

ページ数はたぶん1万くらいだろう。この本は読まない限り、次の頁が開けないのだ。

だからといってこれ以上読めないのも事実だった。

ラテン語、ギリシャ語、その他多くの言葉で書かれわけのわからない絵文字まで書かれているこの本を、根気強く解読してきたのはい

いが、７０００頁（ページ）を境にまったく分からなくなってしまった。パソコンで２ヶ月がかりで調べあげたのに、未だに似た形の文字すら見つけられていなかった。
バレクは頭をくしゃくしゃとかいた。そして長い前髪を思いっきり引っ張った。
「いてっ」
バレクは呟いた。いつものように独り言だった。バレクの人生はチーターのように早足に進んでいた。そこら辺にいる子供とは訳が違う。学力だけをとれば、大人以上のものをもっていた。
そんなバレクがこんな古い本ごときに足止めを食らっているのだ。今まで、何度この本をビリビリに破いてやろうと思ったことか。だが紙は薄いわりに頑丈だった。それに投げようと思っても、重たくてとてもできなかった。
「面倒くさい本だな」
そう言ってバレクは本を閉じた。
表紙の紙は何か特殊な物でコーティングされているようで、さわり心地がよかった。四すみには銀色の鉄で簡素な飾りがしてあった。伝統的な形かどうかは分からないが、バレクはこの飾りを気に入っていた。
バレクは部屋に２つあるうちの動いている方の時計に目をやった。この２つの時計は科学の力で太陽と結びついているため、電池もいらず、一秒たりとも狂わない。
動いていないのは、父さんからもらったものだ。最初は動いていたが、ある日、嫌な音と共に止まってしまった。たぶん、ネジかなにかが外れてしまったのだろう。
時計の針は１０時を少しすぎたところをしめしていた。なんとも微妙な時間だ。
朝ご飯を食べるには遅すぎるが、昼ご飯は早い。だが、バレクの腹は何かを求めて、悲鳴を上げていた。昨日から水以外、何も食べていないのだ。

バレクは仕方なく、一階に下りていった。

バレクの住んでいる所は首都から１２０?ほどいったところの草原にある。
この辺では、２階のある家は裕福だし、そういう家は片手で数えられるぐらいしかない。だが、裕福だからといって生活が楽なわけでもない。あくまでこの辺の住人にとってはであって、首都に行けば高層ビルが建ち並び、科学の技術も隅々まで行き渡っている。
バレクは顔を顰めた。この家は階段がぎしぎしなるし、貧乏だから雨漏りをなおす金もない。生活をするのがやっとだ。
それに比べ、博士の試験で首都に行った時は、車が空を飛び、人が空を歩き…実際は窓にかかっている透明の道だった…立体映像（ホログラム）のキーボードでインターネットを使っていた。
バレクはその携帯用パソコンがどうしてもほしかった。形は腕輪になっていて、色は五色ある。
その他多くの科学品を見たとき、親の反対を押し切ってまで首都に行ったかいがあった、とバレクは思った。スイッチ一つで電話も出来るし、インターネットの他に図書館を利用することができる。この発明品は、すべての博士の称号をもつ者の手によってつくられた。だからバレクは科学にのめり込み、博士の称号をもったのだ。

バレクにとって先生などに興味はなかったが、先生→博士の順でないと、とれないと知ったので嫌々取った。
称号は仕事をするためにあたってとても大事なものだが、バレクの場合は、どちらも役に立ったことはなかった。せいぜい近所の住人に褒められたり、うわさ話にされたぐらいだ。
居間に行くと、母さんが新聞を広げ、コーヒーを飲んでいた。
朝の一仕事を終えて、一服ついたというところか。
「あら、バレク。やっと来たのね」
新聞から顔もあげずに言ったその言葉に、息子に対する心配や苛立

ちはまったく感じられなかった。バレクは机の上にあったパンを2つつかみ、棚からりんごを一つ出した。
「来たけど、すぐに戻るよ」
そう言って戻ろうとしたが、母さんが机の方に指をさした。
「それなら、そこにあなた宛の封筒があるから持って行きなさい」
バレクは母さんが指さした方へ目をやった。確かに封筒が置いてあった。
だが、それを手に取るのには気が引けた。なぜなら封筒の色が黒色だったのだ。バレクは中の物がどんな物か、心配になってきた。
「母さん、中見たりしてないよね？」
母さんは少し笑った。
「私がそんな母親に見える？」
バレクは安心した。そして微笑みかけてこう言った。
「全然。疑った訳じゃないんだ」
バレクは封筒を掴み、階段を駆け上がった。そして、ドアの鍵をかけた。こうしておけば、もし誰かが来たとしても、この怪しい封筒を隠すだけの時間がかせげる。
パソコンを机の上におき、封筒を開けた。中にはこれまた黒い紙と黄色いカードが1枚入っていた。バレクは、紙の前にそのカードを確かめた。
表…と思える方に黒い文字で「Ａ－００９」という文字が印刷されていた。
バレクには、この文字が何を意味するのか分からなかったが、あまり気にとめなかった。
今は、この紙だ。怪しい封筒に入ってくるくらいだから、きっと良からぬ事が書かれているに違いない。
バレクは恐る恐る紙を広げた。手紙とも言えるものには、白い文字でこう書いてあった。

バレク・アントネア様へ

この度は、博士の称号を取得しましたことを心からお喜び申し上げます。
あなたのように、お若く、才能溢れる者こそ、この社会で権力を得る者だと私は考えております。
さっそくですが、今日このような封筒をお送りしたのは、ある事件が起きたからでございます。今のところ、はっきりとした事はまだ分かっておりません。そこで、あなた方のような有能な博士に調査していただきたいと思い、この封筒を、お送りしたのでございます。
９月１８日に場所は首都「ノーマ・１１５－９６」で私が知る限りの事を皆様に説明いたします。
自分の名を世間に広めるため、己の科学力をつぎ込んで作り上げた物を試すため…など、どんな目的があろうと構いません。参加は自由ですが、もし私に協力して下さった方にはランクを上げようと考えております。
それでは、９月１８日にノーマ・１１５－９６でお待ちしております。

――　Ｊ

手紙を読み終えたバレクは、ベットの上に腰を下ろし、パンにかぶりついた。
この「Ｊ」という人物は、文を書くのが下手だと思った。重要…というか、必要最低限の事しか記されていない。ましてや、自分の事など「Ｊ」しか書かれていないじゃないか。
このノーマ・１１５－９６に行くべきだろうか。とバレクは思った。
Ｊ本人も気になるが、この事件の方がバレクの興味を誘った。なぜ

なら今の科学でも解明出来ないのは明らかだったからだ。首都といえば、全てにおいて先を行き、どこよりも華やかなことで有名ではないか。バレクはやっと笑った。
こんなにぞくぞくしたことはいついらいだろうか。いや、初めてのような気がする。
9月18日といえば、ちょうど2週間後だ。今すぐにでも出発しなければ間に合わない。バレクはベットから飛び降りた。
はやく母さんに言わなきゃ。なんと言おうか…。

首都に行く用事が出来た。旅行に行く。など、いろいろな言い訳が思い浮かんだが、そんなへたな嘘は見抜かれるだろうと思った。
結局、この手紙を見せた方が早いということになった。
バレクは階段を駆け下りた。また首都に行けると思うと、そこまでの道のりのことなど気にもとめなかった。
道のり…道…。何かひっかかる。道の途中に山があり、それを越えなければいけない、という事ではない。もっと簡単で身近にあるもの。
その時、階段がミシミシ鳴った。バレクにはこのヒントが十分すぎた。
そう、金だ。
生活するのがやっとのバレク達にとって、首都に行くなどという贅沢は言ってられないのだ。今回は試験の時のように、移動や宿泊時の費用を負担してくれるわけでもない。
現実を受け入れられないバレクの前に母さんが通りかかった。
「どうしたの？こんなところで」
バレクは顔を上げた。なんと言うことだ。これでは手紙を自分で処分すること出来ない。いつも閉じこもってばかりの息子が、階段を駆け下りてきたのだから、何もないよということでは済まされないだろう。

バレクの顔に汗が滴り落ちた。きっと焦りと驚きの表情が浮かんでいることだろう。
バレクが黙ってしまったので母さんは自分から切り出した。
「この手紙に何かまずいことでも書いてあった？」
そういってバレクの手から黒い紙をひったくった。そう、取ったのではなく、ひったくったのだ。
そして何も言わずに黙々と読み出した。
バレクは気が気ではなかった。自分の目の前で絶望の一言がちゃくちゃくと育っている。母さんはきっとこう言うだろう。「絶対だめよ」と。
もしも当たったら心理学でも勉強しようか。と思った。現実から目を背けている間に母さんは、手紙を読み終えた。そして、こう言った。
「絶対にいったら駄目よ」
おしい。あと少し足りなかった。それでも、バレクにとっては予想とあまりにも近かったので、思わず笑いそうになった。
だが、そんなものはすぐに消え失せた。ノーマ・１１５－９６に行けないどころか、首都にも行けないのだ。バレクの楽しみは一瞬にして消え去ったのだ。
その時、バレクは、がっかりといった感情が顔に出ないように必死にこらえた。
家の事情が分かっているのに、首都に行きたいなどと駄々をこねる子供のように思われたくなかったのだ。
バレクは階段をゆっくりと上っていった。
「それはいらないから、捨てといてよ」
それだけ言うと、部屋のドアを思いっきり閉めた。家中が音をたてた。

（2）

バレクの母アリーは、この黒い手紙を捨ててはいなかった。

息子のとった行動は明らかにいつもと違っていたのだから、母親がそれに気づかないわけがなかった。

バレクは首都に行きたかったのだ。

アリーは顔を顰めた。なんとふがいない親だろう。いくら頭が良いからといっても、バレクはまだ12歳なのだ。それなのに、家の心配をさせてしまっている。息子がお金の心配をして、今まで何度自分の望みを捨てさせてしまったかと思うと心が痛んだ。

バレク達の住む所には、10代の子供が2人しかいない。ただでさえ少ないのに、その2人はバレクの歳から離れすぎていた。

友達もいない、遊び相手もいない、ゲーム機もない、とするとバレクに残っているのはただ一つ。勉強だ。

教科書、ノート、資料などはすべて国が負担してくれる。学校を通して申し込めば、1週間以内には、必ず配達されてきた。なんとも便利なものだ。

しかし、バレクの場合、学校を卒業してしまったため、新しい資料を注文することも出来ない。

だから、アリーは夫と相談して太陽式のパソコンと古文書をバレクに渡した。

太陽式といっても旧式だが、それでも夫に反対された。

「パソコンなんて、そんな高いものどうする気だ」

と顔を赤らめていた夫に対し、アリーは驚くほど冷静なものだった。

「バレクにあげるんですよ。あの子なら博士の称号を取るかもしれないですからね」

夫はそれ以上、なにも言わなかった。

あの時は博士の称号の事を口に出したから納得したのかと思ったが、
3日後、パソコンをもらったバレクが「やっと買ってくれたんだね。
ありがとう」と言ったので違うと気づいた。
夫のフォーリーも頑張っている息子に何か買ってあげたいと思って
いたし、バレク本人から「パソコンが欲しい」と言われていたのだ。
断る理由はなかった。
アリーはどうしようか迷った。行かせてあげたい…という気持ちが
時間を重ねるごとに強くなっている。
こういう決断は早ければ早い方がいいとアリーは知っていた。
なぜなら、バレクは感心するほど諦めが早いのだ。息子の特技とも
いえるこの性格に何度驚いたことか。
アリーはフォーリーを納得させるような理由が思い浮かばなかった。
何かないかと手紙を裏返したとき、灰色の小さな文字を見つけた。
それを読んだアリーは微かに笑った。

（3）

バレクは部屋に入るなり、ドアを勢いよく閉めた。家がギシギシなった。
そして残っていたリンゴにかぶりついた。涙こそ浮かべていなかったが、悔しくてたまらなかった。
あと一歩だったのだ。母さんさえ許してくれれば、後はこっちのものだった。父さんは絶対に許さないだろうから、仕事から帰ってくる前に家を出ればいい。後はその場に雰囲気と勢いだ。
5分ほど部屋は静かだった。バレクも段々落ち着きを取り戻しつつあった。だが、バレクにとっては珍しく、諦めがつかなかった。
バレクにとって首都とは特別な場所なのだ。夢を叶えるための場所。だからどうしても……。そこでバレクの思考はとだされた。階段の手前と思われるが、かなり遠くから母さんの声が聞こえた。
「バレクー。おりてきなさい」
おりてこいだって？冗談じゃない。とバレクは思った。あんな風に息子の思いを踏みにじっておいて、その上何の用だっていうんだ。
バレクは母さんの言葉を無視した。時々やるが、今回は母さんが憎くてたまらなかった。バレクはリンゴを食べるのをやめ、じっと立っていた。他人から見たらそうなるが、本人は違った。母さんが僕を呼んだ理由を考えていたのだ。
一体なんなんだろう。考えれば考えるほど難しい。
大抵はやっぱり行っておいでとなる。バレクはその考えをすぐに捨てた。確率の低いものに期待しても破られるのがおちだ。
あれこれ考えているうちに、バレクにいい考えが浮かんだ。そして微かに笑った。
「ゲームをしよう」

自分でも聞いたのか、頭の中で繰り返されたのか分からないような小さい声だったが、バレクは少し楽しくなった。
ルールは簡単。2回目の呼びかけは無視する。そして3回目で母さんがどうでるかを自分が決めた3つの中から選ぶ、というものだ。
1つは、5分たっても返事が返ってこない。つまり3回目の呼びかけはない。
2つ目は…、あくまで確率の問題だ…行ってよし、もしくは良い事を知らせるという類(たぐい)のもの。
3つ目は、手紙とはまったく関係のないもの。
可能性があるかないかの問題なので、一応入れてみたが、3つ目の関係のないものが具体的にどんなものか、さっぱりわからなかった。なので、バレクは1つめにかけることにした。
その時、下から声が聞こえてきた。
「聞こえてるんでしょ。親の言うことがきけないの？」
声には少し棘が入っているように聞こえたが、バレクは降りていきたくなるのを、ぐっと堪(こら)えた。ゲームのルールはまもってこそ面白いのだから。
さぁ、あとは5分間のタイムリミットを逃げ切るだけだ。この時のバレクはゲームに夢中だった。いや、夢中になるように心がけた、と言った方がいいだろう。
永遠とも思える時間がやっと終わろうとしていた。

あと30秒。…20…15…10…。あと少し、あと…。
バレクのささやかなゲームは終わった。
なぜなら、部屋のドアは大きく開けはなたれ、そこに小さなカバンを持った母さんが立っているからだ。
これは3つのどれとも違う。ということは、バレクは負けたのだ。
だが、そんなことはどうでもよかった。それよりも、なぜ母さんは僕の部屋にいるんだ？しかもカバンを持って……。
そこでバレクの頭はパズルがすべてはまったかのように整った。

母さんは悪戯っぽい笑みを浮かべた。
「あなたがなぜ返事をしないのか、不思議だわ。それとも、もう諦めがついたの？」
バレクは頭が真っ白になった。
母さんは黒い手紙の裏をバレクに見せた。
「そこに書いてあるわよ。『もしも参加しなかった場合、博士の称号を無効にする』ってね」
博士の称号を無効にするだって？表には参加は自由と書いてあったのに。とバレクは思った。が、顔には出さなかった。もし、僕の考えていることと、母さんがここに来た理由が違ったらと思うと焦った。
「どうしたの」
恐る恐る聞いたその言葉には、不安の色が滲んでいた。
「博士じゃなくなるのはいやでしょ？何のために勉強してきたの」
「でも……」
「でもじゃないの。必要なものは全部入っているから」
全部、ということは食べ物や地図が入っているということだ。
バレクは母さんの手からカバンをひったくった。母さんは驚いた様子を見せずに、ゆっくりとドアを閉めた。バタン、とドアがしまってから、バレクは言った。
「ありがとう、母さん」
それから少したって、階段がギシギシとなった。

（4）

アリーは嬉しくて胸がいっぱいだった。ありがとう、など久しぶりに聞いた言葉だ。
特にバレクからは。
改めて思うと、息子についてあまり知らないことに気づいた。
アリーはバレクが素直な性格だったことに驚かされていた。普通の子供達は、親に向かってありがとうなど、なかなか言わないだろう。
居間についたアリーは椅子に腰を下ろした。バレクは、いつ出発するのだろう。
今日、ということはないだろうな。はやくても明日の朝といったところか。
夫にはそのまま伝えよう、とアリーは思った。きっと怒るだろうが！
博士の称号を無効になるのを望んではいないはずだ。
窓の外では雨が降ってきていた。家が古いので、雫のあたる音が雑音のように鳴り響いていた。
そんな中、二階で音がした。
アリーは雨かと思ったが、階段から音がかろうじて聞こえてくるので、バレクがおりてきたのだと分かった。
息子の行動はアリーを不安にさせるには、十分だった。

（5）

バレクは早速カバンを開けた。中に入っていたのは、パンが数枚と保存食、それに干した肉が数枚。財布に、地図などだった。

バレクは部屋を見渡した。何を持って行こうかと考えると、一番最初に思い浮かんだのは本だった。だが、持って行っても読むわけでもない…読める所はすべて暗記した…。なので、置いておくことにした。

簡素で生活感がまったくないバレクの部屋には、これといってもっていきたいと思う物がなかったので、残りのスペースには、服を入れた。

帽子が１つに、折りたたみ式の傘が１本。Ｔシャツ２枚とズボンが３枚という内容だ。

バレクは地図を広げた。ここから首都までは１２０?。と中の山を越えるとなると…バレクは指でだいたいの道のりを計算してみた。

「１４０…?…」

とても１２歳の少年が旅をする道のりではない。特に歩いていく場合は。

だが、バレクはそんなことを考えもしなかった。１４０?は、すごい長さだが、２週間もあれば行けないことはないだろう。

バレクはカバンを担ぎ、階段を駆け下りた。

玄関の前では、雨が凄まじい勢いで降っているのが見てとれた。

通り雨でないことは山の向こうまで黒雲が続いていることでわかる。

なら、待っていても仕方がない。どうせ出発するのなら、早い方がいいに決まっている。意を決して出ようとした時、母さんが心配そうな顔をして近寄ってきた。

「まさか、今から行くなんて言わないわよね?」

不安を隠しきれない母に対して、バレクは冷静に言った。
「そのまさかだよ。母さん」
「こんな雨の中を歩いていく気？」
バレクはにこっと笑った。その顔はとても愛らしかった。
「これが最後の別れじゃないんだから、そんなに心配しなくてもいいよ」

「行ってきます」

バレクは家を飛び出した。

第二章

さて、第一章を読んだ方は、バレクがどういう人物なのか分かっただろう。勉強熱心で、暗記が大得意。博士という、科学者の中での最高の呼び名を持っているが、友達はおらず、篭もりがちと、典型的なガリ勉だ。

そんなバレクが興味を持った科学についてここで少し説明しよう。

まず、この世界は科学が非常に発達している。宇宙までエレベーターで行けるようになっており、原子力を利用した機会の開発も進んでいる。街ではビルが建ち並び、人が空を歩いているようにも見えるが、実際はそこに道が出来ており、歩行者の安全が保証されている。

車はタイヤではなく浮いている。これは地下から送られてくる蒸気によって持ち上がっている。そのため、道路に人が出てしまうと、飛んでいってしまう危険性がある。

地下にも人が住んでおり、主に工場や発電所として利用されている。このような発達した世界が出来上がったのは、つい３０年前だ。

一人の科学者が開発した「Ｉキューブ」と呼ばれる四角い機械ができたためだ。このＩキューブは当時どの製品よりも最低で２０年は先を行っていた。全ての通信や、赤外線、盗聴器を認識し、厳重に３重ロックのついたコンピューターやファイルでもわずか３秒でアップグレードした。

当のＩキューブは永遠暗号（エタニティーコード）が組み込まれており、当時…今でもそうだが…の技術では解読できなかった。

Ｉキューブの製作者は、自らの子孫にだけ永遠暗号を教え、この世をさった。

それ以来、Ｉキューブを手本として子孫達は次々に新しい機械を作

り上げていった。３０年たった今、子孫達は貴族として、会社として、それぞれ争っている。
１５年前、Ｉキューブの製作者の一族が分裂したとき、政治が不安定になり、国中が大パニックを起こした。
その際、Ｉキューブもどこかに消えてしまい、それからは一族間の争いが絶えないでいる。まぁ、そのおかげで現在のオレシアがあるわけだが。
こんな街中に比べ、バレクの住む所には、機械と言える物がとても少ないのが現状だ。道路もなければテレビなどもない。
地下にも工場などはなく、自然豊かな地域となっている。そのため、働くと言っても農業がほとんどである。
学校は北に５?歩いた所にぽつりと建っている。
空き地のような所で、小、中、高、がすべて同じになっており、教室の数も少ない。
だが、人々はそれを意識していない。Ｉキューブの消失、政治の混乱が重なってしまった時から、考え方が変わってしまったのだ。
それは身分制度とほとんど変わらず、貴族、町人、農民、奴隷となっている。
こんな世界に住んでいるバレクは農民に属しているが、博士でもあるので、その身分は貴族と町人の間にある状態だ。
バレクは今、首都に向かっている。ある手紙が贈られてきたからだが、バレクの場合、興味本位で向かっている。
では、そろそろバレクに目を向けるとしよう。

第三章　（1）

出発から3日。バレクは川の中にいるようにびしょびしょになっていた。
台風とも思えるこの雨と風は、出発してからいっこうに止まず、傘は使い物にならなくなった。
靴は水を吸い尽くして、スポンジのようになってしまっていた。もっとも、バレクはこういうぐしょぐしょになったものが嫌いなので、初日から裸足になってしまっていたが…。
薄暗がりの中、ぼんやりと山が見えてきた。ここまで約５０?。
まだ3分の1だが、だいぶはやいペースだ。そう思うと勇気づけられ、今日は木の影で雨を凌(しの)ぐことにした。
1時間後、すっかり暗くなった中でバレクはようやくたどり着いた。地面は湿っていたが、木の下に来ると雨はぽたぽた落ちてくる雫に変わった。
バレクはカバンを下ろし、腰をおろした。もともとびしょ濡れなんだ。かまうものか。
座ったとたん、全身の力が抜けていき、足が鉛(なまり)のように重たくなった。
「試験の時のように、使者が来てくれればいいのに」
そう、あの時は使いが来てハイテクな乗物で首都まで行ったのだ。
家を出たときはあまり考えていなかったが、自分の体力のなさに驚かされた。
「これだから、田舎は嫌なんだ」
だが、こんなことを言っても何も始まらないな。バレクは早く寝たいという身体の欲求をなんとかはねつけ、カバンからパンを取り出した。
足の先が冷たくなってきているので、温かい物が欲しかったのだが、

これで我慢するしかない。
思った通り、パンは固く、なにより冷たかった。だが、バレクはそのパンをすぐに平らげてしまった。1日1回の食事なんだ…文句なんて言ってられない。
気がつくと、辺りはなにも見えないほど真っ暗になっていた。分厚い雲のせいで月明かりも遮られている。バレクは怖がりではなかったが、どこまでも続く暗い森に1人だけだと思うと、気が引けた。
と、その時近くで音がした。雨のせいでよく聞こえなかったが、近くに何かいるのは間違いなかった。
バレクは目をこらした。どんなに集中して目を細めても、1メートル先を見るのがやっとだったが、何か動物らしき影が見えた。
目が暗闇に慣れてくると、その動物らしきものの輪郭がわかってきた。

そして次の瞬間、バレクはカバンをもって走り出した。
枝が服にひっかかり、足は石や棘で傷だらけだったが、走るのをやめなかった。今までの疲れは一瞬で恐怖に変わっていた。
バレクの心臓はこの雨の音にも負けないくらい強い音を出していた。止まっては駄目だ。もしかしたら、もう、すぐ後ろにいるかもしれないじゃないか。
だが、その逆の可能性もあった。
バレクは暗闇の中にぼんやりと見えたものがなんなのか、確かめたくなった。自分より大きいのは確かだ。でなければこんなに必死で走ったりしない。
バレクは勇気を出して振り向いた。
そしてすぐ見なければよかったと後悔した。
バレクのいた木の下には巨大な猪が、木に体当たりをしていたのだ！
もし、あの時に走り出していなかったら、今頃はあの大きな牙で八つ裂きにされていただろう。
巨大な猪は目を黄色く光らせ、何度も木に身体をぶつけていた。

たぶん、僕の匂いが強いから木の上にいるとでも思っているのだろう。
しばらくすると、猪は体当たりをやめ、地面に鼻を押しつけて匂いをかぎはじめた。頭の中では、はやく逃げなければいけないと分かっていたが、目が猪の黄色く光る目からはなせなかった。
鼻を地面すれすれでひくつかせながら、一歩一歩僕に近づき始めた。そして、ついに顔を上げた。黄色く光るその目は、確実に僕を捕らえていた。
探していた獲物がようやく見つかったのだ。猪は一度鼻を鳴らすと、獰猛(どうもう)なハンターになって僕に向かってきた。
だが、バレクも食われるのをじっと待ってはいなかった。猪が鼻を鳴らした時、金縛りが解けたかのように動き出した。
近くにあった木に手をかけ、死にものぐるいで登りはじめた。
裸足だったのが不幸中の幸いで、足でしっかりと踏ん張ることができた。
ようやく、太い幹に手をかけようかという時に、木が激しく揺れた。おれることはなかったものの、バレクは危うく木から落ちるところだった。
幹を掴もうとしていた手を下ろした時、2回目の激しい揺れがきた。だいたいの想像はついたので、下は見ないようにした。
それより、今は身体をあの太い幹に持ち上げなければいけない。手も足も、この雨と寒さのせいで感覚がなくなるのは時間の問題だった。
思い切って手を幹にかけた時、また激しく揺れた。
だが、バレクは気にしなかった。
こんな所で死んでたまるか。体力ではそっちが上でも、負けず嫌いでは僕のほうが上なんだ！！
そして、最後の力を振り絞り身体を持ち上げた。
すぐにカバンを背中の方に回し、足と手でがっちり幹を掴んだ。
未だに揺れは続いていたが、これで当分は安全だろうと思った。

下をのぞくと、思った通り、あの巨大な猪がいた。今回は獲物が確実に上にいるので全力で身体をぶつけているように見える。
バレクの身体はすぐに葉で覆い尽くされていった。猪のせいで、上からは枝やら葉やら虫やらが大量に降ってきた。おまけに、バレクは身体も服もびしょびしょにぬれているので、そのほとんどが身体にへばりついていた。
雨よりたちが悪い…とバレクは思った。
と、その時良い考えがバレクの頭に浮かんだ。良心が痛んだが、すぐに頭の中から追い出された。そして小さな声で言った。
「名付けて…体力減らして諦めてもらう作戦」
やり方は簡単。降ってくる枝を中心に投げまくる。これだと木が味方になってくれるな。…バレクは心の中で笑った。ネーミングのまんまだ！
さっそく手の届く範囲で枝を探し始めた。だが、探す必要などなかった。
細い枝がそこら中に伸びていたのだ。バレクは細い枝を何本か折り、巨大な猪に投げつけた。身体は大きいので、当はしたが、その分まったく気にしていないようだった。
それなら、と今度はもてるだけ枝を集めて、いっきに落としてみた。さすがに驚いたようで、木から数歩さがり、顔を振った。だが、今回も期待通りの結果は出ずに終わった。むしろ怒らせたらしく、一層激しくぶつかってきた。
その時、バレクにとって嫌な音がした。木がミシミシとなっているのだ。
下を見ると、牙で傷つけられた部分が見えた。古くて固い皮は削り取られ、茶色であろう新しい樹皮もボロボロになっていた。
だが、それはほんの一部だけだったし、こんな雨の中ではっきりと聞き取れるほどの音が出るとも思えなかった。
それもそのはず、この音は下からではなく上からしていたのだ。
バレクがそのことに気づいた時には、もうその枝は折れていた。顔

を上げると、大量の葉よりもバレクを針付けにするものがまっすぐ向かってきていた。
折れた枝は尖っている方を下にして落ちてきていたのだ。
バレクには、落ちてきているというよりも向かってきているように見えた。
その枝はバレクの左足を掠って猪の首を貫いた。
バレクが下を見たときには、猪は息絶えていた。あれだけ恐い思いをしたにもかかわらず、バレクは猪が可哀想だった。
自分がやったわけではないが、罪悪感を覚え、地面に立ったまま串刺しになっている姿を見ると心が痛んだ。
それからしばらくは何も考えなかった。ただ雨が降る森を眺めているだけだった。
どれくらい時間がたっただろうか。頭が働くようになると、すぐに左足の方に痛みが走った。あの巨大猪を一撃でしとめた枝がかすったところから、血が出ていた。手当のための物を持ってきていなかったので、カバンの中からTシャツを取り出し、枝と一緒にしばりあげた。
思わず呻き声を上げそうになったが、なんとか出さずに済んだ。つぎに何か起きても何も出来そうになかったからだ。
傷口からの出血はいっこうにおさまらず、雨が布に染み込んで余計に痛かった。
気を紛らわすために、さっき落ちてきた枝について考えることにした。
あれだけの速さがあったんだ…きっと高い所から落ちてきたに違いない。なら、あの時聞いたミシミシという音は、落ちたとき他の枝にぶつかった音だったのか…？
バレクの頭はだんだん物事を考えられなくなってきていた。体力も気力もなく、そのうえ傷まで負っている。それに危険はさったのだ。
今のところは…。
そこで完全に思考がとぎれ、バレクは深い眠りについた。

（2）

クリーム色の肩まである髪を揺らしながら、少女は笑った。そして、バレクの手をつかみ、二人は一緒に遊んだ。
誰もいない公園――――。そこではブランコの揺れる音と、二人の子供の楽しそうな声だけが響いていた。
どこか朧気（おぼろげ）で、淡い色の景色。空は夕暮れをむかえ、赤々とした太陽がどこか場違いに思えた…。

バレクは目をさました。今のが夢だったことに気づいたのは、それから少し経ってからだった。なぜなら、空は茜色だったし、太陽の光は夢と同じだったからだ。
ゆっくりと身体を起こすと、全身に痛みが走った。木の上で寝ていたのだからしかたないが、首と背中は特に痛かった。それでもなんとか身体を伸ばし、頭の中を整理してみた。
昨日は巨大な猪に追いかけられ、木に登ったら、落ちてきた枝がささって…。
そうだ！あの猪は…。バレクは下を見た。するとそこにはまだあの猪がいた。目の輝きはとうに消え失せ、傷口からは黒々とした血のあとが、そこらじゅうの地面に広がっていた。
バレクは吐き気を覚えた。動物の死体を見るのは初めてだったので、なおさらだ。血といえば…。バレクは左足に目を向けた。
猪ほど大量ではないが、そこにも乾いた血の跡が広がっていた。
バレクはくくりつけていた布を恐る恐るほどいてみた。思った通り、傷口は黒くなり、大きく膨らんでいた。薬草か、せめて水で消毒したいと思ったが、森の中だったし、第一木の上なのでどうすることもできなかった。

しかたなく、バレクはカバンをひらいた。そして新しい布で傷口のまわりだけをしばり、干した肉を取り出した。肉はとても固かったが、疲れ果てた身体にとってはご馳走だった。肉を噛みしめながら、あれからどれくらい眠っていたのだろうかと思った。
空を見ると雲がオレンジ色に染まっていた。昨日までの雨が嘘のようだった。夜明けだと嬉しいな、とバレクは思った。夕暮れだと丸一日寝ていたようなものだし、昨日のような夜をまた過ごさなければいけないと思うと身体の力が抜けていくのがわかったからだ。
その時、枝を掴んでいた右手に痛みが走った。
びっくりして視線をやったが、そこには枝と手以外、何もなかった。気のせいにしては痛すぎる、と思っていた時、下から石が飛んできて、右手を掠った。
少し緊張しながら下をのぞくと、そこには男の人が一人立っていた。茶色の髪を短くかりこみ、顔にはいくつもの傷跡があった。
肩からは黄ばんだカバンをさげ、腰には剣とナイフを下げている。服装は、意外とシンプルで白い長袖のTシャツに、黒いジャケット。ズボンも黒、靴も黒なので、木の上からではどこが境目なのか分からなかった。
バレクが見ているのに気づくと、男は石を投げる手をとめ、大声で言った。
「こいつは、お前がしとめたのかい？」
そういって、地面に串刺しになっている猪を指さした。
バレクも男に負けないくらい大きな声で言った。
「違う。僕はそいつに襲われたんだ」
「じゃあ、これをやったのは誰だ？」
誰…か。バレクは考えた。誰か、という質問に素直に答えると木になる。
だが、それでは駄目だ。納得しないだろう。
バレクは考えた。
「ある意味では奇跡だよ」

男は首を傾げた。
「意味が分からねぇ。お前さん、こっちに降りてきてくれねぇか」
バレクは迷わなかった。四日ぶりに人に会えたんだ。それもこんな森の中で。
それに、剣を持っているけれど殺す気ならわざわざ石を投げてなんかこないだろう。カバンを担ぎなおして、降りようとしたとき左足に激痛が走った。
身体を支えきれなかったため、バランスを崩し木から落ちてしまった。もう終わりかと思ったとき、身体に衝撃がきた。だがそれは地面に当たったのではなく、男に受け止めてもらっていたのだ。
お姫様だっこになっていたが…。
「大丈夫か？」

その顔には驚きと心配があるように見えたが、細めている目を見ると呆れているのが分かる。
「え…ええ。ありがとうございます」
「いきなり落ちて来るんだから…びっくりしたぜ」
落ちるってのは合図を送って出来るもんなのか？と思ったが、言わないでおくことにした。
「それで、奇跡ってのはなんなんだ」
すごく気になるらしい…。話そうとしたとき、今までずっとお姫様だっこをされいるのに気がついた。
バレクは顔を赤らめた。
「あの…その前に…おろしてくれませんか」
「ん？あぁ…すまん、すまん」
男はそういってバレクをゆっくりおろしてくれた。気をつけていたにもかかわらず、左足に力を入れてしまい、顔を顰めた。
そして、そのまま倒れてしまった。
「お、おい。その足どうしたんだよ」
バレクは何とか起きあがりながら言った。

「猪を殺ったその枝が掠ったんですよ」
男はまたわけが分からない、という顔をした。
「まあ、なんだ。その話は後でゆっくり聞かせてもらうとして、まずは傷の手当てをしねぇと」
男はさっそく布をほどいた。さっきとは違って血が少し流れていた。きっと動いた時に傷口が開いたんだ…。
男は傷口を見るやいなや、自分のカバンを取り出して白い塗り薬をぬった。触られたときは痛くて思わず顔を顰めたが、声は出さずに済んだ。
次に緑色の湿布と包帯を取り出した。
「この湿布を傷口にあてて、おさえててくれ」
バレクは言われた通りにした。男は湿布の上から包帯を強く巻き、傷口を叩いて笑った。
「ったぁ！」
「ははは。これでその傷は治ったようなもんだ。なんてったって俺が喝を入れたんだからな」
「本気で叩きませんでした？今」
男は胡座(あぐら)をかいた。
「当たり前だ。喝ってのはなぁ、坊主。本気でやらなきゃ意味はねぇのさ」
信じられない。バレクは呆れた。確かに手当をしてくれたのはありがたいけれど、喝なんて…正直ほしくない。それに…バレクはむすっとした。
「僕は坊主じゃない。男子で前髪がこんなに長いのは珍しいと思うけど？」
男はまた笑った。
「坊主ってのはそういう意味じゃねえよ。まぁ、そうだな、名前は何て言うんだ？」
バレクは途惑いながら言った。
「バレク…バレク・アントネア」

「アントネア？女の子みたいだな」
バレクは包帯が巻いてある所をさすった。
「僕のせいじゃないよ。それにバレクって名前があるんだからいいだろ。あなたは？」
「グレント・ソルナージャ」
「グレント？」
「あぁ。俺の村では鷹という意味だ」
「鷹か。かっこいいですね。グレントさんはこんな所で何をしていたんですか」
グレントはそっぽを向いた。
「グレントさんはやめろ。恥ずかしい」
バレクも楽な姿勢になった。こんな野蛮…力強い人でも恥ずかしいことなんてあるんだなと思った。
「今は旅をしているのさ」
「その顔の傷は？」
グレントは右頬にある古い傷をさすった。
「ああ、これか…。旅をする前は盗賊やらなんやらいろいろやってたからなー」
「だから剣がないと落ち着かないんですね」
グレントは驚いてバレクを見つめた。そして、ニッと笑った。

（3）

「よく分かったな」
バレクもニッと笑った。
「頭は切れるほうなんです」
グレントはバレクから目をそらし、わざと大きく身体を傾けて言った。
「それはそうと、この猪がどうしてこんな凄まじい事になったのかを教えてくれねぇか」
バレクも振り返った。3メートルぐらい後ろで猪は立っていた。
猪を見ると昨日のことが鮮明に思い出された。
死への恐怖、怒り狂った表情、命を刈り取った枝、そしてなによりあの鋭いハンターの目。
バレクは身震いした。あの時は運が良かった。もし枝が猪にとどめをさしていなかったら、今頃は木の上で身動きもとれずにいたに違いない。
バレクが黙ったままでいるので、グレントはどうしたのかと肩を掴んだ。
振り返ったバレクの顔は青白く、血の気が引いていた。
「おい、大丈夫か。話したくなかったら俺もそこまで…」
バレクは無理に笑って見せた。
「いいえ、大丈夫です。グレントさ……グレントには助けてもらったし、あんなのを見たら誰だって何があったのか知りたくなるでしょうから」
そう言ってバレクは後ろの猪を指さした。
「ちげぇねぇ」
それから、バレクは首都に向かっていること（博士というのはいわないでおくことにした）森で猪に襲われていたこと、枝が上から落ちてきたこと等々、今までの4日間をかいつまんで話した。

グレントはじっと座ったまま、バレクの話に耳を傾けていた。
所々頷いたりしてくれたので、話すことに慣れていないバレクにとってはありがたかった。
話終わると、グレントは頭をかかえて背を伸ばした。
「ははは、こりゃたまげたな。落ちてきた枝がどんぴしゃりだって？まるで運の良い漫画の主人公みてーじゃねーか」
「運が良かったのは認めますが、現実に起こったんですから」
少し怒り気味に言ったのがわかったのか、グレントは頭を下げた。
「そうだな」
グレントはそう一言言うと、身体を震わせた。
急にどうしたのだろう。苦い思い出でも思い出したのか、それとも古傷が痛んでいるのかな…。
バレクの心配はことごとく消え失せた。痛んでいるのではなく、笑っているのだ。
「ちょっ、グレント笑ってるじゃないか！！」
「くくく……ばれちまった」
バレクは我慢しきれず立ち上がった。
「酷くないか？こっちは死ぬような思いをしたってのに」
グレントは目を丸くした。無理もない。バレクはちゃんと両足で立っているのだ。
「バレク…お前たてるじゃないか」
バレクもびっくりした。意識せずにやると、こうも痛みを感じないものなのか。
試しにバレクはゆっくり腰をおろした。だが、膝を曲げたとたん、あの激しい痛みが左足を襲い、結局尻餅をつくはめになってしまった。バレクが座り直すのをまってからグレントは言った。
「お前、感情的になると敬語じゃなくなるな」
「え！」
確かに言われて気づいた。慣れていないのと、さん付けをしないのが合わさって、気持ちがゆるんでしまっていたのかもしれない。

「あの、すみません。これからは気をつけます」
バレクが反省しているのを見て、グレントは慌てて言い足した。
「いやいや、怒っているんじゃないんだ。ただ……その……ぷっ」
バレクが顔を上げると、グレントは笑っていた。あぁ、なるほど。
これぞ本場の思い出し笑いだ、とバレクは思った。話しているときに笑い出すなんて、ありえない。
あたりは段々と薄暗くなってきていた。太陽はとっくに姿を消し、雲もオレンジ色から白色にかわっていた。
しばらくして、グレントの笑いがやっと終わった。
「すまねぇ、すまねぇ。つい思い出しちまってよ。その奇跡ってやつを」
バレクは小さくため息をついた。
「僕も、忘れられない思い出になりましたよ」
その後、森は静寂に包まれた。風もなく、小鳥の囀(さえず)りすら聞こえない。木々は季節はずれの雨のおかげで生き生きとしていた。どこまでも続く緑が、バレクの青い瞳に悲しげに映っていた。
夢に出てきた少女。こんな森の中にいると、微かに思い出されてくる…。
「なぁ」
グレントが突然口を開いた。
「え……あの、なんですか」
吃驚(びっくり)したバレクは、もう少しで思い出せそうな夢が頭の片隅に追いやられていくのがわかった。
「お前、これからどうするんだ」
バレクは考えた。
「そうですね…とりあえずは寝ようかなと思ってるんですが」
「いや、そうじゃなくてだな」
バレクはグレントが何を言おうとしているのか分かった。だが、グレントは何か言おうとしてはやめてしまっている。いったいなんなのだろうか。

こういう時は相手から言った方が良いんだよな。それなら…。
「怪我のことで…」
試しに言ってみた。だが…。
「違う」
と、速攻で返された。こういう類(たぐい)ではないらしい。言ってる途中に返事をしたのだから。
「それじゃあ、道中の……」
「それだ！！」
またもや言ってる途中での返事だった。返事をしたときのグレントは、組んでいた腕をほどき、あぁスッキリしたとでも言いそうな表情だった。
「つまり、お前は首都に行きたいんだろう？ここで会ったのも何かの縁ってことで、一緒に行かねーか」
「グレントはいいんですか。他に行きたいところがあるんじゃ……」
「ははは、気にすんな。旅ってのは気楽なもんなんだから」
バレクは笑った。一度断りはしたものの、本当はグレントと一緒に行きたかったのだ。二人のほうが楽しいし、逞(たくま)しいグレントがいてくれれば心強いと思った。
まぁ、理解しがたい事もあるにはあるけれど……。
「僕、嬉しいです。旅の仲間ができて」
「俺だって同じさ、息子みたいでよ」
息子…か。バレクは心の中に何かを感じた。頭の中では嬉しいと感じているが、心が少し痛んでいた。
あまり気にはしていなかったが、それでも相手への言葉の意味がどれだけ大事か分かった気がした。
「それじゃあ、バレク。寝る前に腹ごしらえだ」
そう言って、グレントはバレクの後ろを指さした。バレクは振り返らなかった。そこに何がいるかは、はっきりと覚えているからだ。
「まさか、この猪を……」
「食うんだよ」

一気に血の気がひいた。まず第一にあんなもの見たくないし、内臓やらなんやらを引きずり出すのも嫌だった。こんなの、絶対に１２歳の少年がすることじゃない！

（3）（後書き）

初めまして、葉月晴です。

本当は一週間で更新するはずが、１０日間以上あいちゃったりしてます。

ごめんなさい。

第四章　（1）

結局バレクは猪を見ないですんだ。グレントが猪の腹から内臓を引きずり出したとたん、胃の中の物をはき出してしまったからだ。
全て出したにもかかわらず、内臓の中身を切る音が聞こえてくるので吐き気はいっこうにおさまらなかった。
「あの…すみません」
バレクは動物一つ捌けない自分が情けなかった。だが、グレントはまったく気にしていなかった。
「いいってことよ。考えてみりゃ、こいつに襲われたんだもんな」
それからしばらくは沈黙が続いた。鳥が飛び立つ音が遠くの方で聞こえてきた。かなりの数だ。こんな夜にどこにいくのかな。
バレクの体力は限界にきていた。丸一日眠っていたからといって疲れがとれたわけではない。それに左足の深い傷。嘔吐(おうと)なども加えると、これまでで一番災難にあっているような気がした。
突然、グレントが口を開いた。
「俺の鞄にライターがあるから、それで焚き火をつくってくれないか」
「え…あの鞄の中身を見ても良いんですか」
猪の血を取り除く手を止めないまま、グレントは言った。
「どーせガラクタばかりなんだ。かまやしないさ」
それなら…と、バレクはグレントの鞄をつかみ、足の上にのせた。やはり色あせてはいたが、とても頑丈そうだった。糸の解(ほつ)れや穴もないし、大きな傷もついていない。
バレクは期待をこめて鞄をあけた。最初に目に飛び込んできたのは、傷口にぬった薬だった。あの薬のおかげで今はよくなってる気がする…。
バレクは悲しい笑みを浮かべた。グレントには助けられてばかり

だ。
薬を上に置き、改めて鞄の中身を探った。何も入っていないように見えたが、実際は細々とした物がたくさん入っていた。曲がった鉄釘や、黒ずんだ軍手。清潔とはいいがたいシャツが何枚か、さび付いたスプーンとフォーク、ナイフも数本あった。
バレクはこういった邪魔な物を片っ端から出していった。こんなにたくさんの物を良く持ち歩いているな、と感心するくらいの量だった。
鞄の中身も残り少なくなったころ、興味のそそられる物があった。
手に取ると、それは錆び付いたナイフだった。鞘には綺麗な装飾が施されてあり、真ん中に丸い形が掘られているが、錆びているのでそれが模様なのか玉を埋め込めてあるのかは分からなかった。
ナイフを抜いてみると、刀の部分も茶色く錆びてしまっていた。持ち手のところも布がほどけてボロボロになってしまっているし、相当古い物なのだろうと思った。
刀の長さは30？くらいか…。
バレクは薄暗い中、ナイフをもっと良く見ようと目をこらした。良く見ると、錆びの隙間から青い刀の部分が見えた。
珍しいな…青い刀なんて。手で錆びをとってみようとしたとき、グレントが口を開いた。
「バレク、なにやってんだ。もうすぐ真っ暗になって、何も見えなくなるぞ」
確かに、グレントの言うとおりだった。ナイフを見ているうちに、森は夜の闇に包まれつつあった。
「すみません、すぐにつけます！」
そう言うとバレクはナイフを置き、鞄からライターを取り出した。そして適当に枝を集めそれを石でかこい火をつけた。
すると、焚き火を中心に2、3メートルにわたってオレンジ色の光が当たりを包み込んだ。手の届く範囲はだいたい見えるようになったが、代わりに光の届く範囲以外はまったく見えなくなってしま

った。
闇の中に肉食の獣がいると思うと恐くなったが、今回は一人じゃないんだと自分に言い聞かせた。思えば、獣は火を恐がるんだった！
こんな簡単な事も忘れてしまうなんて…やっぱり落ち着くって大切だなと身をもって知った。
気がつくと、肉を切る音がやみ、パチパチと木の燃える音だけがしていた。振り返ると、そこにいるはずの猪の姿はなく、代わりに山積みになった肉片と皮、骨が綺麗に山積みにして置いてあった。
流れ出る汁と血が地面に広がっている。バレクはまた吐き気を覚えてたが、胃の中はからっぽなので、物を出さずに済んだ。
一方グレントは手についた血や汚れを砂で落としていた。だが、これは手に砂をこすりつけていた、と言ったほうがあっているかもしれない。
バレクがじっとグレントの事を見ていると、汚れを落とし終えたのか、グレントが顔を上げた。
そして苦笑した。
「中身を出すのは良いが、片付けたらどうなんだ。もしかしてあれか？反抗期ってやつか。そりゃ、坊主とか、女の子の名前みたいって言ったのは悪いと思うが、反抗ってのは普通、親にするもんだぞ」
バレクは、はっとして鞄の方に向き直った。中身が無造作に散らばり、鞄も放り出されたかのように逆さまにして置いてあった。
いつのまにあんなふうになったんだ！？さっきまで手に持っていたはずなのに…。
バレクはすぐに片付けに取りかかった。
「すみませんっ。あの…わざとじゃなくて」
そう言って急いで片付けるバレクにグレントは呆れた顔で答えた。
「お前さっきから何回すみません、て言ってんだ」
「え！」
言われてみれば、猪の解体作業を始めてからすみませんを連発している気がする。

「だいたい、さん付けは無しなのに敬語で話すってのはおかしいだろ。こっちが堅苦しいぜ」
グレントはバレクの隣に座り焚き火に手を翳した。
「だから、敬語もなしだ」
「でも…」
「そのでもってのも無し」
バレクはひととおり物を入れ終えた。そして、少し間を置いてから言った。
「それじゃあグレント」
「ん、何だ」
「このナイフもらっていい？」
そう言ってナイフを持ち上げた。
「お前ってさん付けをなしにした時もそう思ったが、切り返しが早いな」
「それは個人の特技ってもんだよ。で、どうなの？」
グレントはバレクの持っているナイフを食い入るように見つめていた。
バレクは、緊張してきた。青い刀という珍しい物だから、こういう武器を一つ持っていたほうが安全だから、という思いもあったが、本当は鞘の持ち手部分に施されている飾りが気になったからだ。どこかで見たことがあるなと思って考えてみると、あの分厚い本の表紙にも同じような装飾が施してあった。
あの本と同じ飾りなら、あれと同じくらい古いことになるし、父さんに見せてたらびっくりするだろうな、と思った。
しばらく沈黙があたりを包んだが、火の爆ぜる音と共にそれは終わった。
「しゃあねぇ。お前にくれてやる」
「ありがとう！グレント」
「いいってことよ」
バレクは嬉しさを顔に表しながら自分の鞄にナイフを入れようと

した。
だが、思いとどまり再びグレントに向き直った。
「このナイフを下げるのにぴったりのベルトってない？」
「…ベルトか…」
少し考え込むように言いながらグレントは自分の鞄の中を探し始めた。
バレクはグレントの中身を出したとき、剣を止める所がついたベルトのような物を見たような気がしたのだ。錆び付いてはいるが、気に入っているし、鞄に入れておくよりも出したほうが格好いいじゃないか。
「お、あったぞ」
グレントがいきなり声をあげた。火に見入っていたバレクは、びっくりしてグレントを見た。
すると、グレントの手には黒と銀色の綺麗なベルトが握られていた。
？ぎ目部分にナイフをぶら下げるための物がくっついている。バレクはこれが何という物なのか知らなかった。
「文句はないだろう？ほらよ」
そう言ってベルトを投げて寄こした。間近で見ると、黒い皮の部分に穴が同じ間隔で開いていて、そこを銀色で縁取りしてあった。
バレクは早速ベルトをしめ、ナイフを取り付けた。不思議な感覚だったが、自分が強くなれたような気がして嬉しかった。
「これで気がすんだろ。さぁ、次は飯だ飯！」
「あんなに食べれないよ、二人だと」
バレクは山積みの肉を見ないようにしながら言った。
「食えない分は、他の獣にくわせてやりゃいいさ」
そうしたら、僕たちは集まってきた獣に襲われないか？と思ったが口には出さず、代わりにこういった。
「そうだね」

猪の肉は意外とおいしく、バレクは襲われた事など気にもとめずに食べることができた。腹が減っていた分、最初はかなりのはやさで減っていた肉の山も、１０分とたたない内にそのはやさは落ちていった。５個目の肉片を手にとりながら、バレクはグレントの事を考えた。

昔は荒くれ者だったようだが、とても親切だし頼りになる。調査が終わって家に帰ったら、父さんに旅に出ても良いか聞いてみようかな。もちろん、黙っていったことについてはこっぴどく怒られるだろうけど。

肉にかぶりつきながら、バレクはグレントのほうを見た。

そこには座っているはずのグレントの姿はなく、代わりに倒れている姿があった。

「グレン……」

そう言って立ち上がった時、バレクはグレントが倒れているのではなく寝ているのに気づいた。バレクは信じられないという顔をした。

今の今まで肉にかぶりついていたのに、今度は音もなく寝ているのだ。

しかも、どこから出してきたのかマントにくるまって気持ちよさそうに…。

バレクはふつふつと怒りがわき上がるのを感じた。

普段はめったに生意気な口を聞かないバレクだったが、この時ばかりは我慢できなかった。そしてこう呟いた。

「なんなんだ、こいつっ…」

（2）

あれから一週間。家を出てからすでに１１日がたっている。
地図がないぶんどこまできたかわからないが、首都が真東にあるため、だいたい進んでこられた。
時間があと3日しかないとわかってはいたが、バレクはあまり不安を覚えてなかった。それだけグレントとの旅が楽しかったのだ。
夜明けと共に出発して、休みは昼食の時だけ、夜は太陽が沈む頃には寝る、という体力の無いバレクにとってはかなり辛かったが、歩いている時はグレントが昔の思い出について話してくれた。
グレントの村は野生の獣たちと一緒に暮らしていて、家の中にコウモリや蛇がいるのは当たり前だったそうだ。3年に一度の間隔でワニが村にやってきて3年間共に暮らし、また3年後に帰ってくるということも起きているらしい。
バレクはびっくりして、喰われないのか？と聞いたらグレントは笑って、
「あいつらにとって俺たち村の住人は仲間なのさ。他の獣たちも同じ。一緒に狩りをすることもあるんだぜ、俺は無いがな。まあ、言葉は通じないが、俺たちと獣たちの間にはいくつかの規則があるんだ。俺たちは特定の獣は襲わない。かわりに向こうは他の獰猛な獣から村を守るってわけだ」
と言っていた。
今の時代に、そんな話があるのか？と言いそうになったが、慌てて口を閉じた。グレントの事を疑いたくなかったのだ。
2日前から、森の中で人を見かけるようになった。相手も剣や銃などを持っているので、話しかけたり、手をふることはなかったが、それでもバレクは嬉しかった。きっと首都の近くまで来ているのだろうと思えるからだ。

遠くのほうでは、カラスたちが声を響かせていた。森には強い光が差し込み、空はオレンジ色に染まった。夕暮れだ。
「ねぇ、グレント。今日はどこまで行くんだ？」
「日が暮れるまで歩こうと思ってな」
「今日にかぎってなんでだ？いつもならとっくに腰を下ろして、今頃寝てるのに」
グレントはしばらく黙っていたが、考え込むような顔をして言った。
「……嫌な予感がするんだ」
その声はとても暗かった。バレクはその予感がなんなのか気になったが、それ以上は質問しなかった。嫌な予感か…。バレクは1週間前の出来事を思い返していた。あまり良いものではない。巨大な猪に殺されそうになったことを思うと、今でも寒気がする。だが、そのおかげでグレントと出会い、楽しい旅が出来ているのだ。あの日を思い出す時はグレントの事だけ思い返そうと心に決めた。
すっかり日も暮れ、あたりはだんだん闇に包まれていった。あれから一言も喋らず黙々と歩を進めてきていたバレクだが、さすがに声をかけたくなっていた。
なぜなら足が言うことをきかなくなってきているからだ。
左足に負った深い傷はすっかりよくなっていた。グレントの薬と…あまり認めたくないが…喝のおかげで。今は黒い一本の線だけが残っている。
決心して声を掛けようとしたバレクだったが、沈黙を破ったのはバレクではなくグレントだった。
「よし。今日はここまでだ」
そう言って、鞄を肩から落とした。バレクはまってましたと言わんばかりに身体の力をぬいた。そして、草の上に倒れ込んだ。
「はぁー。やっと終わった。その言葉を今まで以上にまってたんだよ」
グレントも座り込んだ。

「おいおい。今から飯を食ったら、かわりばんこに見張りをするんだぞｚ」
「は？見張り？なんで」
「人を見かけるようになっただろ？夜ぐっすり眠っているときにざっくりやられちまったらどーすんだよ」
…ざっくり…ね。ずいぶんとわくわくすることを言ってくれるじゃないか…。
「そんなこと誰がするんだよ。金目当てならざっくりする必要なんてないじゃないか」
するとグレントは右手の人差し指をたて3回振ると同時に3回舌を打った。
「わかってないなー。人の内臓が高く売れるのを知らないか？」
人…の内臓だって…？バレクは目眩がしてきた。だが、グレントは構わず続けた。
「盗賊や無法者ってのは人を殺すこと躊躇なんてしない。それに内臓が売れるとわかってんのに身ぐるみはがすだけで満足するはずないだろ？
大きな街なんかじゃ特にそうさ。必ず闇の競売場があって身分の高い貴族なんかは必ず参加してる。ほとんどは死んだ人間から取り出した物なんだが、たまに赤い血のついた新しいのが出てくる。そうなりゃ競りは大盛り上がりさ。
必ず0が6はつく。だから、金の無くなった貴族たちは、使っていた奴隷を生きたまま競売場に持ってくるのさ。そしてみんなの前で腹を切り裂いて競売品を高々と上げる。
『さぁ、新鮮なこいつにはいくら払う！』ってな」
バレクの顔からは血の気が引いていた。グレントの話は、頭の中にその映像を映し出すには十分すぎた。
人の内臓を売る…しかも生きた奴隷を目の前で殺すだって…？それが人間のすることか！？
バレクは恐怖と怒りが混ざり合っていくのを感じた。

グレントはこういう事に慣れていたが、話している相手が12歳だと気づいて慌ててバレクのほうを見た。バレクの顔は青ざめ、手や身体は震えていた。

…しまった！！ついいつもの調子で喋っちまった！

「す、すまん。大丈夫か」

バレクは弱々しく頷いた。

「悪かった。ついいつもの調子で喋っちまったんだ。お前はそこに座ってろよ、俺が全部準備をするから」

「いいや、続きを聞かせてよ」

グレントの動きが止まった。

「……は？」

バレクは顔をあげ、グレントをしっかりと見据えた。

「続きが聞きたいんだ。ここまで話されると気になるし、そういうのは知っといたほうがいい気がするんだ」

「本当にいいのか？物を食べれないくらい、気持ち悪くなるぞ」

「いい。途中で吐いても気にしないで続けて良いから」

グレントはしばらくの間黙っていたが、決心して座り直した。

「……話すぞ」

「ああ」

バレクは半分上の空で答えた。

「内臓をもぎとられた奴隷は、すぐには死ねないんだ。悲鳴をあげ、台の上で鎖に縛られているにもかかわらず、もがき苦しむ。

一方で、そいつの主人は一度競られた物を必ずと言っていいほどの確率で腹の中に戻す。

なぜなら、ついた値段に満足が出来ないからさ。そしてもう一度取り出してこう叫ぶ。こんなに赤いのが、そんなちんけな値段なのか？と。

貴族達はまってましたといわんばかりにまた競りを始める。毎回そうさ。場内を埋めるのは歓声と断末魔。ステージを染めるのは憐れな奴隷の生々とした赤い血」

グレントの話はそれで終わりだった。だが、バレクはまだわからない事がたくさんあった。
もっとも、わからないままのほうがバレクには良かったのだが…。
「その奴隷は……どうなるの？」
「内臓・指・目・首・脳にいたるまですべてが売り払われる」
バレクは気持ち悪いなんてもんじゃなかった。身体は重く、胃はねじれたように感じていた。
だが、身体が悲鳴を上げているにもかかわらず、頭ははっきりしていた。
「じゃ、じゃあ売られた物は？貴族達はそれをどうするの？」
グレントは重々しい口調で話した。
「目や指、顔のままのやつは飾られる。廊下や壁、階段などいたるところにな。貴族の間では、そういう物が多ければ多いほど富と財産があるとされている」
「残りは……」
そう言ってグレントは口をつぐんだが、思い切って言った。
「喰うんだよ、他の獣と同じように。ただ、その味は世界の珍味として数えられ、一度口にしたらやめられない」
グレントはバレクが心配になってきた。バレクのほうを見ると、こちらに背を向け胃の中の物をはき出していた。息を切らし、肩を震わせている…。
グレントはバレクに歩み寄り、後ろから震える肩をがっしりと掴んだ。
「すまなかったな、バレク。お前はもう休め。今日は俺が見張りをする。だから安心して眠れ」
言い終わると同時にバレクの首は頭を支えられなくなり、身体の力は抜けていった。バレクは深い眠りについていた。
グレントはそんなバレクを草の上に寝かせてマントをかけてやった。
そして自分は干した肉を取り出しバレクの隣に座ってこれからの

見張りに備えた。

（2）（後書き）

お久しぶりです。ざっと計算して3週間ぶりの更新です。
名前の通り8月が誕生日なので浮かれてたら小説のことなんて頭の中から飛んでおりました（笑）

もう一言付け加えると、話がまったく進まない！！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4610u/

Last Word

2011年9月29日14時30分発行